

## 第23回研究会

平成19年5月18日(金)午後2時  
市役所 2階 第2会議室

### 主な内容

- 協働の具体的なイメージについて
- 市民協働パネルディスカッションについて

6月24日(日)に開催する「市民協働パネルディスカッション」では、環境や防災など分野ごとの課題をあげ、協働すればこのように解決できるなどと各委員が自分の考えを発表していくことにしておりますが、今回はその発表の内容の確認と、それらを踏まえて意見交換しながら協働の構想と理念・ルールを整理していくための当日の資料について議論していきます。

- 【小林会長】凶悪な事件がおこった。近所付き合いが濃いところは、このような事件も起こりにくいのかもかもしれない。昔と違い、協働を意識しないと近所付き合いができない世の中になった。江南市では協働を意識して、現在協働のルールを作っている最中だ。6月24日にパネルディスカッションをするので、それに向けての準備を今日は行いたい。みなさんから出していただいた発言内容は、当日参加者に資料として配るのか。
- 【事務局】今日の資料は各委員が書いてもちよったもので、発表の原稿になっているものもある。発言内容はレジュメのようにして出したほうがよいのかもかもしれない。
- 【小林会長】聞くだけでなく目で追うと理解が深まるので、当日配ってもよいのかもかもしれない。発言の順番を決めることと当日の流れの確認をしたい。発言の内容を配ると、こんな内容の話をするのだということがわかる。それぞれ、何について話すか、タイトルも決めていきたい。当日の前半1時間は、各委員に1人5分以内で話してもらい、休憩後は意見交換を行う。ここではボロクソに言われてもかまわないということだった。司会とコーディネーターの役割分担も調整したい。当日の資料はどうするのか。
- 【尾関委員】協働の原則のところは、配布して読んでもらわないと話聞くだけでは理解してもらうのは難しいのではないかと。各委員の発言内容も、委員から提出されたものを配布すればよいのではないかと。
- 【小林会長】前回議論した具体例のような話を皆さんにしてもらう。まちづくりのために個々の活動があるということである。
- 【尾関委員】市民協働の基本的な考え方については、おおまかにパネラーがカバーをしている。パネルディスカッションの内容のつながりについては小林会長に説明してほしい。
- 【小林会長】最初に、パネラーの皆さんが、協働をこのように考えていますということこ

るから入ってはどうか。

【尾関委員】パネラーが話し、全体の流れを確認する意味でルールについて私が話す。参加者も資料を始めて読むので、戸惑うようなことはできるだけ避けてすっきりとしたパネルディスカッションの運営にしたい。

【小林会長】最初に私が、趣旨説明をすることになっている。様々なまちづくりを進めていくことが協働の目的であるということだが、それだけではイメージがわかりづらいので、こんなまちづくり、こんなケースがあるということについて、各パネラーから具体的に紹介をしてもらう。それらを踏まえて、全体の構想、理念とルールについて話してもらう。このような流れでよいのか。発表の順番とタイトルをどうするか。

【事務局】今日出席している委員に簡単に発言内容を発表してもらってはどうか。

【栗本委員】 発言の内容

買い物袋の持参運動を始めたきっかけは、大人から子どもまで買い物はするので、身近なことであるし、ごみ減量のためなると思ったからである。市民、スーパー、市役所などが一体になって取り組むことができる。始めた当初はこれが協働だとは思わなかった。1万枚くらい作って配布したが、現在も持参率は低い。行政も配布したが、それ以後は連携した活動ができなかった。なぜできなかったのか。課題は何なのか整理したい。

先日57運動の一環として江南駅前で開催活動があった。今回はスーパーでも行うと聞いていたので、当然声がかかると思ったが、参加することはできなかった。どうしてそうなったのか。ごみ減量の協議会、環境の審議会に以前は参加していたが、今は参加していない。行政とコミュニケーションがなかったことや足をなかなか運ばなかったことで行き違いがあった。思いを受け止めてもらえなかった理由として、私たちの情報不足、担当課の職員の異動などで情報が共有できなかった。市民活動のマンネリ化もある。これからどうするか、考えていかないといけない。

分別指導員の学習会を地域で行うようになったので、地域でごみ減量の話ができるようになればと思う。問題点は、お互いの理解の不足から支障が起きる。思いを伝え、受け止めてもらえるように努力する必要があると感じている。

【小林会長】行政とのコミュニケーションとネットワークづくりについても話してもらった。

【尾関委員】お互いの理解不足を解消し、思いが通じ合うようにするにはどうしたらよいのか。問題点があれば、行政にも知らせていく必要がある。その辺りが足りなかったということも伝える必要がある。市民協働でどうするかを考えていく必要がある。

【栗本委員】買い物袋の持参は手段で、環境に対して、意識を持ってもらう必要がある。環境の変化は実感が難しいので、意識を変えてもらうにはどうしたらいいのかとい

うことがポイントである。職員がかわったばかりなのでわからないと言われたこともある。それは言い訳にはならない。ネットワークを作るとか、メンバーの意識の問題もあるが、市民協働の体制ができていなかった。

【尾関委員】市民協働でごみの問題に取り組もうとするのがよい。防災もいっしょである。

【小林会長】協働で実現したいのは、買い物袋の持参の普及である。協働は手段になる。この話をすれば協働が見えてくる。地域で環境を考える中では、買い物袋の持参は手段になる。

【藤田委員】レジ袋をなくそうということもある。

【小林会長】買い物袋を広げることが目的ではない。とりあえずタイトルは「買い物袋持参を広げるために」にしたい。

【望月委員】 発言の内容

誰でも安全に暮らせる住みよいまちづくりについて話をしたい。県内の地震の強化地域が増えたが、江南市は指定されていないので、「地震のことは心配しなくてはいいいのではないか」という声もあるが、それは違うと思う。東海大地震のほかにも直下型地震があり、それはいつ起こるかはわからないのでこれを提案した。消防署にも防災対策の現状を聞いた。

現状として、市の防災訓練でボランティア支援本部の活動訓練を行っており、昨年度は消防本部と社会福祉協議会でボランティアコーディネーター養成講座を開講した。防災意識の普及については、市民まつりや消費生活展で行っており、町内の集会でも指導を行っている。今後は、NPO、ボランティアグループ、市役所、社協、地区自主防災会などと協働で協議会を設立して活動することや、防犯活動の役割も担えるような仕組みが必要である。

自主防災会については、区・町内会の役員が主体となっているので、1年交代であり、訓練もすべて消防本部がお膳立てし、義務的に参加しているなど行政に頼りすぎていないか。この解決のためには、規約を改定して区・町内会とは別に自立した組織としていく必要があり、「自分たちの住むまちは、自分たちの手で守る」ということに徹して、市民と行政がともに協働の心を学び、進めていける仕組みが必要である。

とにかく、隣同士が仲良くして地域が主体になって取り組まないといけないと思う。

当日は防災リーダーを知ってもらうチラシも用意したい。皆さんの手元に渡すだけでも啓発につながってくる。

タイトルは「地域の安全は自分たちの手で」としたい。

【岩根委員】発言説明の前に聞きたいが、保健センターで赤ちゃん訪問はしているか。

【宮島委員】希望者に行っている。また、今年度からは第1子には全員行っている。

【岩根委員】また、下校時の子どもたちを見守るシステムは江南では何と呼ばれているのか。

【事務局】呼び方はいろいろあると思う。

【岩根委員】 発言の内容

いろいろな子育ての支援策があるが、それを必要としている人が知っているのか疑問である。赤ちゃんポストに3歳の子どもが入れられたというニュースを目にしたが、お父さんは他の方法があることを知らなかったのではないか。元気のいいお母さんたちはサークルを立ち上げている。1人で子育てを楽しむお母さんもいる。苦しいが相談できない人もいる。地域や行政でこんなことをやっているということ伝えたい。

地域放課後教室は、地域の大人たちが子どもたちを育てていこうという取り組みとして文科省はアピールしているが、広がりが鈍い。急には無理である。赤ちゃんが生まれたときから地域で育てていくことが理想である。今は繋がりが希薄になっているので、あえて仕組みを作っていくとけない。各地域単位で子育てを見守りたい。子どもが3歳くらいまでのお母さんを対象に、困った人に声かけをするドアノッキングと呼ばれるものがあるが、知らない人がいきなり子育てについてどうですかでは受け入れられない。保健センターの家庭訪問についていけば安心される。子どもが成人するまで見守っていくためには、小さいうちは保健センターや子育て支援センター、保育園が連携し、その後は、学校とスクールガードなどが連携をする仕組みが出来るとよい。

しかし、校区外に通う子どもには課題がある。子ども会入会のお知らせなどは学校を通して配られるため、校区外に通う子どもたちは自分の地域のことがわからない。地域で見守り隊をつくって見守っていくというシステムがあれば、そういった子どもたちも地域で受け入れる体制ができてくる。ハンディのある子は学校から帰ってくると居場所がない。外国人の子どもについても学校と見守り隊で情報交換をして、居場所づくりが出来ればと思う。

タイトルは「地域で子育て見守りたい」にしたい。

【小宮委員】 発言の内容

地域の知人（高齢者の方たち）のお手伝いをするようになって、様々な老いの問題が見えてきた。できるだけ人のお世話にならないようにと無理をして、骨折したり病を悪化させてしまうことがとても多い。

たくさんの経験という生きた知恵を持ちながら、自分を活かす場所を失って孤立してしまう人が多い中で、「手伝って！」と言える強さを私も持ちたいと思う。これさえしてくれたら後は自分でやれる。夏物と冬物入れ替えのときの棚からの上げ下ろし、入院しているおじいちゃんの洗濯物を取ってきてくれれば、洗濯はできる。

これを作ったからあの人に届けてほしい、等々、ほんの些細なことをとても喜んでくれる。

よそのお父さんお母さんたちと関わるようになって、自分の親を客観的にみたり、少し距離をおいてつき合うこともできるようになった。親世代の人たちが、自分の老いと向き合う姿を目の当たりにして、自分自身の老いもすぐそこまでやってきていることに気付かされる。私はこれを自分自身の「老いの学習」だと思っている。

自分が自転車に乗れなくなって杖をついて歩くようになったとき、私もやはり、それでもできる限り人のお世話にならずに生きたいと思うだろう。ではその為に何が必要なのだろうか。誰かのお世話をしたら、自分が何かを手伝ってもらえるようなシステム作りや、「老いの学習」を基礎にした、地域の中の人と人のネットワーク作り等、老いを心穏やかに過ごすためには、それなりの努力が必要だと思う。

【宮島委員】介護保険ではできないちょっとした困りごとを助けてもらうことを小宮委員は言っている。

【小宮委員】タイトルは「花の陰 赤の他人は なかりけり」にしたい。

< 休憩 >

【藤田委員】 発言の内容

第九を歌う活動をしてきたが、これを文化活動として継続的にやっていくにはどうしたらよいか。協働でやっていけたらよいと考えている。そのためには担い手がまず必要である。一般の人はどのくらい理解があるのか、育てていくにはどうするか。

近隣市の第九を歌う会にも参加しているが、江南市とは補助金に差がある。補助金がなく自主公演でも文化活動ができる自信がついた。しかし、継続的に行うにはどうしたらよいか。協働事業でももう少し行政に力を貸してもらえたらと思う。

江南花卉園芸公園の活動にもかかわっているが、そこでは子どもから老人まで参加できる「森の合唱隊」を作りたいと考えている。その中で人間性の育成をしたい。市内にはいくつか合唱団があるが、幅広い年齢層の中で、若い人たちに、協働の気持ちをわかってもらい、音楽を通してまちづくりに一役買ってほしい。

愛知江南短期大学とも連携していきたい。協働を担う人の育成に、協働では何が出来るかということを考えていきたい。

【行政経営課長】50周年事業で第九をやったが、行政と市民とがいっしょに事業を行った。

【藤田委員】行政は目に見えないものにお金をかけることに躊躇する。市と協賛で文化活動を行っていきたい。

【小林会長】市民による自主事業で行うことができたが、今後として行政との協働で文

化事業ができる」とよいという発言である。

【行政経営課長】市民の力が結集すれば、こういう大きな力が得られるというイメージである。

【藤田委員】会場確保が大変だったので、それを行政にバックアップしてもらいたい。これはお金を出さなくてもできる。

【小林会長】タイトルは「未来に向けた文化の振興」ではどうか。

【藤田委員】自主公演ができたが、行政との協働があればもう少し活動しやすくなる。

【尾関委員】市民が自立した、市民だけの協働の活動であり、江南の文化力はすばらしいと思った。会場の問題については行政もかかわるが、企業などもかかわって市民協働でやればできるのではないか。

【藤田委員】タイトルは「未来に向けた文化の振興」でよい。

【早瀬委員】 発言の内容

ふくらの家について話をしたい。外国人と地域の人にそれぞれニーズがあった。地域は「空き店舗が多くなり、寂しくなったので、灯りがついているといいね」。行政は「外国人が増えて、対策が必要だ」、ボランティアは「共生のために何か活動をしたい」、事業所は「働く外国人の対応をしないといけない」、学校では「外国人の子どもが増えてきている」というニーズがあった。

ボランティアで何かやりたいと思っている人が多く、そのような人を逃がしてはいけないので、とにかく「ふくらの家」に来てほしいと言っている。子どもが好きな人は子ども塾に参加してもらい、時間が合わない人もおやつ作りだけでも手伝ってもらいたい。運転ができる人は、子どもの送迎をしてもらいたい。また、子育て経験者は、子育ての相談にのってあげてほしい。機械に強い人はパソコン指導をしてもらいたい。活動の中で、自分のやれることを見つけてもらいたい。

また、スキルアップのためにボランティア研修やワークショップも重要である。ふくらの家は1週間に延べで120人くらいが来る。みんなに使ってもらっている。タイトルは「ふくらの家にいらっしやい」にしたい。

【尾関委員】 発言の内容

理念のところはさらりと話す。

「市民のくらしの変化と江南のまちづくり」では、暮らしの変化とまちづくりにどう対応したらよいのか。「どんなまち、こんなまち」はパネラーが話すところである。「市民協働はなぜ新しい方法なのか？」では、なぜ新しい方法なのか必ず聞かれると思うので、自分なりに理由づけをした。

特徴の1つとして、市民協働のまちづくりは実行の段階までやるということである。まちづくりに実行の段階まで直接参加するということがこれまでの参画とは大きな違いになる。

特徴の2つ目として、大きく市民の力を結集するためには運営のルールが必要に

なってくるということである。「市民協働のルール」では、「目的の共有」「対等な関係」「活動の評価」「法令の順守」の説明である。これまで原則とルールに分けて「法令の順守」をルールとしてきたが、簡潔にしてルールの中に表した。「相互理解」については、「対等な関係」の中で述べているが、「行政と対立する関係ではない」ということを意識的に入れた。市役所は、市民から信託されているものであり、市民協働のまちづくりに行政と対立する人は参加してもらわなくてもよい。行政とは一定の距離をおいて、自立してまちづくりをしたい人やグループもあり、批判したい人もいるが、その人たちは独自にやればよい。行政マンにも市民が怖いという人がいるが、必要以上に市民を警戒してほしくない。市民協働はこういう原則でやればよいのではないか。

タイトルは「市民協働の運営ルール」にしたい。

【小林会長】発表の順番だが、関連した分野については続けて発表したほうがよいかもしれない。

【栗本委員】私の発表のタイトルは「買い物には買い物袋を持って行きましょう」にしたい。

【小林会長】 発表の順番を板書

栗本委員 買い物には買い物袋を持って行きましょう

岩根委員 地域で子育て見守りたい

早瀬委員 「ふくらの家」にいらっしやい

藤田委員 未来に向けた文化の振興

大倉委員 高齢者の生きがいづくり

小宮委員 花の陰 赤の他人は なかりけり

望月委員 地域の安全は自分たちの手で

社会福祉協議会

太田委員 全体の構想

尾関委員 市民協働の運営ルール

【尾関委員】資料については、市民協働研究会の第1次素案として、参加者の意見を聞いて、意見の反映や修正をしていく。ガイドブックを作るのであれば、その素案として出した方が説得力があるのではないか。

【小林会長】当日出す資料を膨らませて、ガイドブックや条例をつくっていくということを参加者にわかるように表示したほうがよいかもしれない。

【事務局】以前「市民協働の定義」についての提案が委員からあったが、「市民協働」ということについて全部読まないと考え方がわからないというのではなく、簡単に説明できる部分があったほうがよい。その後の部分で目的の共有、対等な関係とはどういうことなのか詳しく書いてあるという構成がよいと思う。

【小林会長】パネルディスカッションには熱心な人が来るが、市民の中にはガイドブックを途中で読むのをやめる人もいるかもしれないので、簡単な説明の部分があった

ほうが丁寧かもしれない。

【尾関委員】愛知県のルールブックは行政とNPOとの協働に限定であるが、それでもわかりづらい部分もある。市のレベルでは市民が参加しやすいルールができればよい。

【小林会長】「市民協働とは」を前文と同じレベルにして、構成がわかるように目次的に「市民協働でめざすまちづくりの目標 こんなまちをつくりたい」「市民協働の原則」「市民協働の活動・事業の形態」「市民協働のまちづくりを成功させるために」という項目を並べてはどうか。

【事務局】資料のタイトルは「市民協働ガイドブック(仮称)素案」概要にするか。

【栗本委員】資料の文字の大きさは大きくしてほしい。

【大竹委員】当日の資料は、まだガイドブックに至る体裁ではないと思う。例えば図式のような記載は、パネルディスカッションの資料としてならよいが、ガイドブックとしてはおかしいのもっと整えないといけない。今後これをもとにガイドブックを作りますというくらいにしたほうがよいのではないか。

【小林会長】研究会第1次提案」ではどうか。ガイドブックの素案ではないが、研究会の提案という意味である。



【尾関委員】それでよい。

「責務を自覚し」という表現があるが、市民協働の取り組みは「自覚しなさい」と人に言われることではない。自覚しているから参加しているのであり、やはり市民には押し付けがましいという気がする。

【小林会長】参加者からそのことについて意見があればまた議論になる。

【栗本委員】一緒に活動しているグループのみんなにパネルディスカッションのことを話すと、前回の意見交換会での発言がどうなったのかと言われる。関心を持たれているので、意見が出たものは、この意見はこうなったと対比して表わしてほしい。

【小林会長】意見を受けて議論が進んでいるが、たどっていくと何が元だったのかわからなくなってきている。それを思い出して整理をしたい。あと、私から一つだけ文言について言いたい。対等な関係のなかに「・・性別・・とかかわりなく・・」とあるが、男女の他にセクシャルマイノリティーの人がおり、性別とすると区分けができないので「別」をとって「性」と表現してほしい。

【小宮委員】5つの柱の中の「人材の育成」が5番目となっている。順番としてはもっと上にしてほしい。

【小林会長】この番号は優先順位を表わすものではないと注釈を入れてはどうか。

【事務局】そのようにしたい。

今回は、6月24日(日)に開催する「市民協働パネルディスカッション」での各委員の発言内容を確認し、当日の資料の位置づけについても確認しました。次回は、今回委員から発言のあった昨年秋の意見交換会での参加者の意見と、これまでの研究会の議論がどうなのかということについて確認することにしました。